

江戸東京研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所との協同によって生まれた江戸東京研究センターにおいては、設置されて日が浅く、研究活動も試行錯誤の段階であろうと思われる。創設間もないにもかかわらず、多様な江戸東京研究の諸分野にまたがる研究・教育活動実績が認められ、出版物、学会発表等の研究成果も蓄積されてきている。科研費等外部資金の応募・獲得状況もめざましい。

しかし、2019年度中期目標・年度目標・達成指標については抽象的であると思われる。今後の目標策定にあたっては、以下の2点を踏まえることが必要であろう。第1は、HPの〔江戸東京研究センター>研究ブランディング事業>事業計画書>年次計画〕に公表されている「平成31(令和元)年度」の「目標」「実施計画」との整合性である。第2は4つの研究プロジェクトとの関連である。中期計画と年次計画を階層的に位置づけ、達成指標は具体的に「指標」となる項目を挙げる必要がある。これらの腑分けによって、ややもすると雑駁な印象を与えかねない研究活動の諸側面も、自ら系統づけられ整理されるように思われる。今後に期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

・第1の「令和元年度の目標、実施計画との整合性」について

令和元年度の目標は「江戸東京の社会的・文化的特徴に関する研究と〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」であった。その目標を達成するための実施計画は、4つのプロジェクトと全体のブランディング戦略のそれぞれに分けられる。目標の「江戸東京の社会的・文化的特徴」に関しては、①水都－基層構造プロジェクトでは、後背地や近郊農村をつなげて分析するテリトリーオの方法を用いて、江戸東京の全体を水と地域形成の視点から解説し、同時に生活や生業、風土により形成された文化的景観を意味づけ、②江戸東京の「ユニークさ」プロジェクトでは、参勤交代や農村地方からの人口流入によって多様な人々が集合したという江戸の基本的な性格に注目し、人口の推移や構成の問題から江戸東京の社会に見いだせるユニークさを明らかにし、③テクノロジーとアートプロジェクトでは、諸外国の大都市における多様な事例の調査研究をおこない、東京が達成している自然と歴史の生成変化(メタボリズム)の特性を文化的な側面から明らかにし、④都市東京の近未来プロジェクトでは、人間の生活に豊かさをもたらす社会の実現とそれを支える都市構造について、近代以前の文脈を保持しつつ生成変化する東京の固有性という視点から明らかにすることであった。いずれも江戸東京の社会あるいは文化の特徴を解明しようとしたものであって、目標と実施計画の整合性を保つことに努力した。また、目標の「〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」に関しては、前年度よりも広範な市民・一般参加拡大を目標として、外堀市民塾や後述のIIの1.1の①のように国内シンポジウムを多数開催し市民・一般参加の機会を増やただけでなく、ヴェネチアでの国際シンポジウムをも実施して国外にも情報を発信し交流を促進して、研究内容を世界的な規模で広く還元する活動にも着手した。

・第2の「4つの研究プロジェクトとの関連」について

指摘いただいた「4プロジェクトの中期計画と年次計画を階層的に位置づけ、達成指標は具体的に「指標」となる項目が必要」に関して、令和元年度の「2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書」においては、4プロジェクトごとに別々の課題を設定するのではなく、それらが融合して推進できるような中期目標を明記し、それに対応する年度目標を記述して、全体での達成指標を可能な限り明示した。2019年度をもって事業を中止するという文科省の突然の決定によって、当センターの研究体制も見直しに迫られ、予算も当初の1/3に削減されたことから、プロジェクト間に相互の強弱が生じ系統づけにくい環境になった。このことから、複数のプロジェクトの在り方について今後早急かつ重点的に修正すべき課題と考えている。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

江戸東京センターは、2019年度の大学評価委員会から指摘された評価結果について、第1の「令和元年度の目標、実施計画との整合性」への対応については、HPに公開されている平成31年度の実施計画が記載されたことを確認することができ、評価できる。

第2の「4つの研究プロジェクトとの関連」については、4つのプロジェクトを融合して推進できる中期目標を明記したとされるが、「2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書」に書かれたものは、2020年度目標の達成指標に具体的な記載がされていることが確認できる。

2019年度の2つの目標、「江戸東京の社会的・文化的特徴」(研究目標)、「〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

(社会貢献・社会連携目標) という評価区分の異なる二つの目標が「研究活動」の欄と一緒に記載されているが、性格の異なる2つの目標は項目を分けて記載する方が分かりやすいと思う。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1 研究プロジェクト

(1) 水都一基層構造

プロジェクト・リーダー：高村雅彦(デザイン工学部建築学科教授)

研究テーマ：都市と地域のテリトリーと文化的景観

(2) 江戸東京の「ユニークさ」

プロジェクト・リーダー：横山泰子(理工学部創生科学科教授)

研究テーマ：「武都から帝都へ」

(3) テクノロジーとアート

プロジェクト・リーダー：都合により年度途中で安孫子信(文学部哲学科教授)から山本真鳥(経済学部経済学科教授)に交代

テーマ：東京のパブリック・アート

(4) 都市東京の近未来

研究プロジェクト・リーダー：北山恒(デザイン工学部建築学科教授)

研究テーマ：国際的研究ネットワークの構築・プロジェクトサイトの策定・行政とまちづくりの連携研究

2 講義・教育プログラム

1. 秋学期全14回 デザイン工学部講義「風土と建築」
2. 春学期全14回 デザイン工学部講義「フィールドワーク」
3. 春学期後半全14回 デザイン工学部講義「都市史」
4. 春学期全14回 履修証明プログラム「人文地理学セミナーA」
5. 秋学期全14回 履修証明プログラム「人文地理学セミナーB」
6. 秋学期全14回 履修証明プログラム「風土と建築」
7. 春学期全14回 履修証明プログラム「フィールドワーク」
8. 春学期後半全14回 履修証明プログラム「都市史」
9. 春学期全14回 履修証明プログラム「江戸の文芸と文化Ⅰ」
10. 秋学期全14回 履修証明プログラム「江戸の文芸と文化Ⅱ」
11. 秋学期全14回 履修証明プログラム「伝統文化と民衆世界Ⅱ」

3 シンポジウム・研究会等

以下、開催日、テーマ、場所、参加者の属性と人数の順に記載する。

1. 2019/4/3(水)、研究会「エクハルト・ハーン先生を囲んで：ベルリン近郊のエコシティと東京のグリーンインフラ」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 40
2. 2019/4/10(水)、神田明神・江戸東京文化講座 第2回「東京・水の都市、水の地域」 神田明神文化交流館 学外 63
3. 2019/5/14(火)、ローザ・カーロリ講演会「The origin and development of Tsukudajima in Edo-Tokyo (江戸・東京における佃島の誕生と発展)」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 17

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

4. 2019/5/16(木)、神田明神・江戸東京文化講座 第3回「江戸東京におけるカップ」 神田明神文化交流館 学外 36
 5. 2019/5/19(日)、磯崎新 特別講演会「東京は首都足りうるか 大都市病症候群」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 700
 6. 2019/5/31(金)、神田明神・江戸東京文化講座 第4回「古代地形から読む神田明神とその景観」 神田明神文化交流館 学外 47
 7. 2019/6/15(土)、神田明神・江戸東京文化講座 第5回「将軍の鷹狩りと江戸の町」 神田明神文化交流館 学外 37
 8. 2019/6/27(木)、神田明神・江戸東京文化講座 第6回「江戸狂歌の大流行～山の手でも下町でも、神田明神でも」 神田明神文化交流館 学外 39
 9. 2019/7/2(火)、東京文化資源会議との研究会 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 8
 10. 2019/7/6(土)、シンポジウム「東京と江戸をつなぐー風景と場所」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 188
 11. 2019/7/11(木)、神田明神・江戸東京文化講座 第7回「力持ちの流行と神田明神の力石」 神田明神文化交流館 学外 23
 12. 2019/7/18(木)、研究会「コンテンツ・ツーリズムと東京」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 51
 13. 2019/7/23(火)、神田明神・江戸東京文化講座 第8回「東京の文化的景観～江戸城外濠と葛飾柴又」 神田明神文化交流館 学外 59
 14. 2019/8/2(金)、研究会「近代東京と『スポーツの都』」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 21
 15. 2019/8/7(水)、第10回外濠市民塾「外濠浚渫工事見学会」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 45
 16. 2019/8/17(土)、「玉川の語源を探る夕べ」 二子玉川ライズ 学外 50
 17. 2019/9/21(土)、「御嶽山で語る畠山重忠 父と娘玉川が紡ぐ魂の邂逅」 武蔵御嶽神社神楽殿 学外 50
 18. 2019/9/28(土)、研究会「美術という見世物 ～江戸から東京へ～」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 73
 19. 2019/10/1(火)、建築フォーラム vol.1「東京駅・皇居前広場・皇居一天皇制と「帝都」の空間をめぐる」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 98
 20. 2019/10/5(土)、江戸東京アトラスプロジェクトワークショップ 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 20
 21. 2019/10/15(火)、建築フォーラム vol.2「アジア主義を更新する」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 92
 22. 2019/10/29(火)、建築フォーラム vol.3「東京をやりなおすー東京文化資源区からの提言」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 85
 23. 2019/11/5(火)、建築フォーラム vol.4「近未来の『東京』の表象：ストリート/スクリーン/内部空間」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 83
 24. 2019/11/17(日)、シンポジウム「江戸東京の東西南北」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 156
 25. 2019/11/19(火)、建築フォーラム vol.5「発明と読み替えー状況を変える建築的思考」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 85
 26. 2019/11/21(木)、研究会「東京首都圏のグラフィティとストリートアート」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 8
 27. 2019/11/26(火)、建築フォーラム vol.6「都市における演劇のコモンズ(共有地/共有知)を巡って」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 75
 28. 2019/12/3(火)、建築フォーラム vol.7「POST SPRAWL TOKYOー大都市の時代の終わり」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 90
 29. 2019/12/8(日)、講演+座談会「江戸の天文学」 法政大学小金井キャンパス 学内 79
 30. 2019/12/14(土)～15(日)、歌舞伎学会共催シンポジウム「歌舞伎の江戸東京 都市空間と劇場街」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 147
 31. 2020/1/13(月)～14(火)、国際シンポジウム「水の都市としての東京とヴェネツィア～過去の記憶と未来の展望」 カ・フォスカリー大学(イタリア・ヴェネツィア) 学外 90
 32. 2020/1/25(土)、研究会「東京の京友禅」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 49
 33. 2020/2/19(水)、「気候変動と雨水活用～雨水の基準と制度を考える日独シンポジウム～」 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 118
 34. 2020/2/26(水)、Edo Castle Mission(江戸城・江戸の都市の復元的研究)との研究会 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 15
 35. 2020/2/29(土)、年度末シンポジウム 法政大学市ヶ谷キャンパス 学内 29
- 以上

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・江戸東京研究センター パンフレット vol.3「江戸東京研究センター 2019 年度報告書」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・江戸東京研究センターweb サイト https://edotokyo.hosei.ac.jp/symposium_collegium

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

1 著書・報告書・制作物

1. 2020年3月 EToS 叢書2『風土(FUDO)から江戸東京へ』法政大学江戸東京研究センター（安孫子信監修）
2. 2019年9月 書籍『江戸東京の都市組織に挑む 上野, 本郷, 谷中, 根津, 下谷』彰国社、法政大学江戸東京研究センター+法政大学デザイン工学部建築学科+南カリフォルニア建築大学+トリノ工科大学
3. 2020年3月 報告書「テクノロジーと東京」法政大学江戸東京研究センター
4. 2020年3月 年度報告書「EToS vol.3」法政大学江戸東京研究センター
5. 2020年3月 映像「玉川源流物語」法政大学江戸東京研究センター水都府中プロジェクト
6. 2020年3月 書籍『江戸とアバター 私たちの内なるダイバーシティ』田中優子, 池上英子
7. 2020年3月 「武蔵玉川絵図」神谷博
8. 2020年3月 シンポジウム報告書「地域から外濠の再生を考える」外濠再生懇談会+江戸東京研究センター+エコ地域デザイン研究センター+東京理科大学外濠及び神楽坂地域調査研究推進室
9. 2019年5月 書籍『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』文学通信、小林ふみ子（共著）
10. 2019年4月 書籍『建築史への挑戦 住居から都市、そしてテリトリーオへ』鹿島出版会、陣内秀信・高村雅彦
11. 2019年11月 書籍” Giancarlo De Carlo and ILAUD. A moval frontier”, Fondazione OAMi Milano, 陣内秀信（共著）
12. 2019年7月 報告書「生誕百年 廣末保の仕事」法政大学国文学会、田中優子
13. 2019年8月 報告書「都市美」名古屋造形大学、北山恒（共著）

2 学会論文

以下、題目、著者、雑誌名、発表年月の順に記す。

著者：出口 清孝

雑誌名：民俗建築(日本民俗建築学会)第155号

発表年月：2019年5月

論文標題：東京のなかの銀座；都市文化の魅力のありか

著者：陣内秀信

雑誌名：都市計画 Vol.68, No.4

発表年月：2019年7月

論文標題：南六郷ハウス

著者：北山恒

雑誌名：新建築

発表年月：2019年8月

論文標題：革命はすでに始まっている

著者：北山恒

雑誌名：建築雑誌 no.1728

発表年月：2019年9月

論文標題：なぜ水辺に都市が栄えるのか

著者：高村雅彦

雑誌名：経済界 第55巻

発表年月：2019年11月

論文標題：島原城下町を「水の聖地」から読み解く

著者：高村雅彦

雑誌名：水の文化 第63号

発表年月：2019年11月

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

3 査読付き論文

発表標題：近代における居住環境改良思想の満鉄住宅標準設計への影響

発表者名：包慕萍・高村雅彦

学会等名：東アジア都市史学会

発表場所：中国上海・上海社会科学院

発表年月：2019年6月

発表標題：20世紀東アジアの都市住宅-1950年代上海における計画思想とその制度から読む他都市との比較-

発表者名：邵 帥

学会等名：東アジア都市史学会

発表場所：中国上海・上海社会科学院

発表年月：2019年6月

発表標題：白川村の地形モデルを用いたCFD解析と合掌造り民家の温熱環境実測

発表者名：小川夕季・出口清孝・川久保俊・大風翼

学会等名：日本建築学会環境系論文集第84巻, 第763号

発表年月：2019年9月

3 学会発表

発表標題：上海における建国直後の計画思想とその制度 東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その3

発表者名：邵帥・高村雅彦

学会等名：2019年度日本建築学会大会（北陸）

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：大連沙河口からみる初期の満鉄標準住宅 東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その4

発表者名：包慕萍・高村雅彦

学会等名：2019年度日本建築学会大会（北陸）

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：ヴァナキュラー建築に施されたパッシブデザインの応用に関する研究(その4) 定量的データに基づくヴァナキュラー建築の分布傾向と気候風土の関係の把握

発表者名：加藤圭・出口清孝・川久保俊・河野峻大

学会等名：2019年度日本建築学会大会

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み(その1) 研究目的と実測概要

発表者名：吉田功樹・川久保 俊・出口清孝・山下大樹・渡辺智也・岡埜紘子

学会等名：2019年度日本建築学会大会

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み(その2) 建物及び地表面温度の24時間連続実測

発表者名：岡埜紘子・川久保 俊・出口清孝・吉田功樹・山下大樹・渡辺智也

学会等名：2019年度日本建築学会大会

発表場所：金沢工業大学

発表年月：2019年9月

発表標題：数値流体解析を用いた外皮表面積の差異が集合住宅内の温熱環境に及ぼす影響の検

発表者名：荒田史朗・川久保 俊・出口清孝・山下大樹・和久井景太

学会等名：2019年度日本建築学会大会

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：全国を対象とした地域間健康格差の実態把握と要因分析
発表者名：松尾諒・出口清孝・川久保俊・加藤圭
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：自治体のHP及び各種計画におけるSDGs関連情報の盛り込み状況
発表者名：石川怜・川久保俊・出口清孝・茂手大貴・高瀬直也
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：室内外の温湿度が皮膚水分量に与える影響に関する通年調査（その1）－皮膚水分量・経皮水分蒸散量の通年変化－
発表者名：大門俊介・川久保俊・出口清孝・星旦二・石田紗英
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：室内外の温湿度が皮膚水分量に与える影響に関する通年調査（その2）－マルチレベル分析に基づく皮膚水分量に与える影響を与える要因の把握－
発表者名：石田紗英・川久保俊・出口清孝・星旦二・大門俊介
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：夏季の屋外における暑熱環境対策が心拍と脈拍に与える影響の検証
発表者名：渡辺智也・川久保俊・出口清孝・吉田功樹・山下大樹・岡埜紘子
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：ホットスポット分析を用いた全国市町村別健康格差の時系列比較
発表者名：北田文也・出口清孝・川久保俊・松諒・加藤圭
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：暖房方式とその使用方法の違いが人体エクセルギー消費速さに及ぼす影響のCFD解析による可視化
発表者名：和久井景太・川久保俊・出口清孝・宿谷昌則・山下大樹
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：脱近代あるいは非都市
発表者名：北山恒
学会等名：2019年度日本建築学会大会
- 発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019年9月
発表標題：港湾と都市の連携の観点から見たみなとオアシスの機能配置と運営
発表者名：橋本航征・福井恒明
学会等名：第60回土木計画学研究発表会
- 発表場所：富山大学
発表年月：2019年11月

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

発表標題：河川堤防の形態とアクセス整備に着目した水辺アプローチの多様性

発表者名：堀越義人・福井恒明

学会等名：第 60 回土木計画学研究発表会

発表場所：富山大学

発表年月：2019 年 11 月

発表標題：明治以降の風景写真に見る都市風景の変化とその要因

発表者名：八杉遥・荻原知子・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

発表標題：水害常襲地の土地利用変遷と都市計画一倉敷市真備地区を対象に

発表者名：久保拓巳・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

発表標題：市民参加の地域活動における市民の意向－外濠市民塾の活動を対象に

発表者名：田中咲・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

発表標題：明治以降の新聞記事に見られる広場等公共空間の変遷

発表者名：堀川萌・荻原知子・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

発表標題：九段・神保町周辺の地域史資料アーカイブ化とその活用

発表者名：田邊喬太・福井恒明

学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会

発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）

発表年月：2019 年 12 月

4 招待講演・国際学会

発表標題：Città e territori ereditati

発表者名：Hidenobu Jinnai

学会等名：Principi e metodi della valorizzazione in Giappone e in Italia、ANCSA アルガン賞授与式

発表場所：イタリア・グッピオ市

発表年月：2019 年 4 月

発表標題：古代地形から読む神田明神とその景観

発表者名：高村雅彦

学会等名：江戸東京文化講座

発表場所：神田明神

発表年月：2019 年 5 月

発表標題：中国大連沙河口地区の再生計画

発表者名：高村雅彦・加藤智也他

学会等名：大連理工大学建校 70 周年記念ワークショップ「大連歴史街区の更新設計」

発表場所：大連理工大学

発表年月：2019 年 5 月

発表標題：廣末保の仕事

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

発表者名：田中優子
 学会等名：法政大学国文学会
 発表場所：法政大学
 発表年月：2019年7月
 発表標題：水都東京の再考～建築からテリトリーオまで～
 発表者名：陣内秀信
 学会等名：全国まちづくり会議 2019in 東京
 日本都市計画家協会
 発表場所：竹中工務店東京本社
 発表年月：2019年9月
 発表標題：徹底解剖！万里の長城
 発表者名：監修：高村雅彦・邵帥
 学会等名：番組名：地球ドラマチック
 発表場所：放送局：NHK Eテレ
 発表年月：2019年11月
 発表標題：歴史から見る多様なネットワーク
 発表者名：田中優子
 学会等名：朝日新聞社
 発表場所：法政大学
 発表年月：2019年11月
 発表標題：1980年代の〈石川淳〉と〈江戸〉
 発表者名：田中優子
 学会等名：日本女子大学文学部
 発表場所：日本女子大学
 発表年月：2019年12月

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・江戸東京研究センター パンフレット vol.3 「江戸東京研究センター 2019年度報告書」
- ・江戸東京研究センターweb サイト <https://edotokyo.hosei.ac.jp/publications>

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して 2019 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2019 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019 年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

1 書評

評者名：篠原資明

媒体：東京新聞・中日新聞

書評掲載年月：2018年9月

著書名：立原道造 故郷を建てる詩人(水声社 2018年7月)

著者名：岡村民夫

評者名：串田純一

媒体：表彰

書評掲載年月：2019年4月

著書名：立原道造 故郷を建てる詩人(水声社 2018年7月)

著者名：岡村民夫

評者名：成毛眞

媒体/掲載年月：週刊新潮 2019年4月（朝日新聞 2019年2月、日本経済新聞 2019年3月）

著書名：へんちくりん 江戸挿絵本（集英社インターナショナル 2019年2月）

著者名：小林ふみ子

2 メディア報道

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

1. 2019年4月7日号 「持続可能な社会に向けて異分野融合でアプローチ」 異分野融合研究の一例として江戸東京研究センターの研究活動を紹介、サンデー毎日
2. 2019年7月号 「磯崎新 特別講演会『東京は首都足りうるか』—大都市病症候群」 開催報告記事、雑誌「新建築」
3. 2019/5/29 江戸から見ると「三都」 磯崎新特別講演会について、毎日新聞
4. 2020/1/23 江戸から見ると「数学と暦学と天文学」 講演+座談会「江戸の天文学」について、毎日新聞
5. 2020/2/5 江戸から見ると「ベネチア・東京」 ヴェネツィアでの国際シンポジウムについて、毎日新聞

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・江戸東京研究センター パンフレット vol.3 「江戸東京研究センター 2019年度報告書」
- ・江戸東京研究センターweb サイト https://edotokyo.hosei.ac.jp/symposium_collegium

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

2019年4月19日開催された外部評価委員会において、目標の設定および実施計画はおおむね妥当かつ適切で、計画通りあるいは計画以上の成果があがっているとして、委員からSあるいはAの評価を得た。特に、出版物やシンポジウム、研究会等の外に見えるかたちでの成果がめざましい点が評価された。また、私立大学ブランディング事業が今年度で終了することとなっても、なんらかの方法でぜひ継続することが望ましいとの指摘があった。2019年度の評価については、当初2020年4月下旬に面談のうえで3名の外部評価委員より評価を受ける予定であったが、新型コロナウイルスの影響のため5月下旬に延期された。現在、書類による審査、評価を受けており、6月には外部評価の内容が判明する予定である。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

1 2019年度中に応募した外部資金（全て科研費）

(1) 研究代表者

- ・基盤研究(A) 福井恒明 2,611,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(B) 岩佐明彦 553,000円 被災者回復ステージのガラパゴス化とそのブレイクスルー
- ・基盤研究(B) 出口清孝 5,833,000円 パッシブデザイン導入に向けた世界の建築気候図作成と気候変動適応策への応用
- ・基盤研究(C) 小林ふみ子 780,000円 江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究
- ・若手研究 金谷匡高 1,155,000円 明治初期転換期における士族授産による地場産業の発展と武家地空間の変遷について
- ・若手研究 栗生はるか 1,950,000円 「銭湯」とその周辺地域の持続可能性に関する研究

(2) 研究分担者

- ・基盤研究(A) 岩佐明彦 800,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 金谷匡高 700,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 栗生はるか 400,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 高見公雄 500,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 高村雅彦 800,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 出口清孝 250,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 根崎光男 250,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(A) 長谷部俊治 250,000円 テリトリーオによる地域の包括的デザイン手法の開発
- ・基盤研究(B) 川久保俊 807,000円 パッシブデザイン導入に向けた世界の建築気候図作成と気候変動適応策への応用

2 2019年度中に採択を受けた外部資金（全て科研費）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(1) 研究代表者

- ・ 基盤研究(B) 2017-2022 高村雅彦 1,250,000円 東アジア都市の住宅地形成と集合住宅に関する学術調査
- ・ 基盤研究(B) 2017-2020 岩佐明彦 664,000円 東日本大震災を踏まえた応急仮設住宅「熊本型デフォルト」の検証
- ・ 基盤研究(C)(基金) 2017-2021 米家志乃布 900,000円 民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究
- ・ 基盤研究(C)(基金) 2018-2021 松本剣志郎 800,000円 近世都市インフラ維持管理の社会史的研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2021 川久保 俊 1,800,000円 住環境改善がもたらす健康影響シミュレーション手法の開発
- ・ 基盤研究(C) 2019-2022 山本 真鳥 900,000円 オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2021 中丸 宣明 700,000円 明治前期における新聞に付随する書籍・印刷物の研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2023 大塚 紀弘 900,000円 資料調査に基づく日本中世における渡来人の基礎的研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2021 安孫子 信 1,120,000円 オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究
- ・ 基盤研究(B) 2019-2022 小口 雅史 3,310,000円 古代末期防御的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築

(2) 研究分担者

- ・ 基盤研究(B) 2015-2020 高村雅彦 590,000円 台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から
- ・ 基盤研究(S) 2017-2022 川久保俊 1,000,000円 住環境が脳・循環器・呼吸器・運動器に及ぼす影響実測と疾病・介護予防便益評価
- ・ 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）2019-02-07～2022-03-31 川久保俊 370,000円 都市における暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオに関する国際共同研究
- ・ 基盤研究(A) 2018-2022 小口雅史 150,000円 平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化
- ・ 基盤研究(B) 2016-2020 小口雅史 1,720,500円 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究
- ・ 基盤研究(B) 2017-2021 小口雅史 260,000円 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究
- ・ 基盤研究(B) 2016-2020 大塚紀弘 30,000円 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究
- ・ 基盤研究(B) 2019-2021 安孫子 信 220,000円 ベルクソン『時間と自由』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の深化
- ・ 基盤研究(B) 2019-2021 陣内 秀信 1,000,000円 地理的表示(GI)を活用したSDGsに寄与する農業と農村振興に関する日欧比較研究
- ・ 基盤研究(C) 2019-2023 小林 ふみ子 100,000円 高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究
- ・ 基盤研究(A) 2017-2020 森田 喬 400,000円 人と社会の側からみた地図・地理空間情報の新技術とその評価

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 研究開発センター市ヶ谷事務課作成資料および科学研究費データベース KAKEN による。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特色1 文系と理系の異分野融合の研究組織であり、かつ研究業績が上がっている点。 ・ 特色2 学外の研究組織（大学、博物館）や地域、企業などとの連携活動の可能性があり、かつ実際に実績が積み上げられている点。 ・ 特色3 学内の人的ネットワークを多様に作る点。 	

(3) 問題点

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

内容	点検・評価項目
・2019年度をもって事業を中止するという文科省の突然の決定によって、当センターの研究体制も見直しに迫られ、予算も当初の1/3に削減されたことから、プロジェクト間に相互の強弱が生じ系統づけにくい環境になった。このことから、複数のプロジェクトの在り方について、今後早急かつ重点的に修正すべきことが大きな問題点である。	

【この基準の大学評価】

江戸東京研究センターの研究活動は、シンポジウムやセミナーなどの交流・公開の機会を通じて活発に行われている。多彩な内容の著書、報告書、論文、学会発表、科研費の採択状況など、旺盛な研究活動には目を見張るものがある。教育活動についても、新たに「神田明神江戸東京文化講座」を開講するなど、社会教育活動に努めていることは高く評価できる。

江戸東京研究センターの研究姿勢は、「異分野の融合」を目指したとはいえ、自己点検・評価シートの記載内容を見る限りでは、諸研究を縦割的（個別、領域内の共同研究）に集合化させる様子が見られる。統一テーマのもとに異なる領域や専門分野を横串に通すスタイルの学際的な共同研究がほとんど見られないことは惜しまれる。昨年度をもってブランディング事業を中止するという突然の決定と、それに関係する大幅な予算削減の状況下で、プロジェクト間に強弱が生じ系統づけにくくなったことや、複数のプロジェクトの在り方について、まずは修正すべきことがあるということは理解できるものの、今後、江戸東京研究センターの設置理念に則して、学術論文や科研費の研究プロジェクトなどで、研究領域を横断する学際的な共同研究に期待したい。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的研究教育拠点の形成。 エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所が共同し、国際化の時代に対応した先端的な江戸東京研究を行い、研究成果を社会に広く還元するとともに、持続可能な地域社会の構築を目指す教育拠点となる
	年度目標	2019年度のテーマは「江戸東京の社会的・文化的特徴に関する研究と〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」を事業目標とする
	達成指標	一般市民にも開かれた従来型の研究会とシンポジウムの他、今年度中に新たな市民講座の開設と社会人教育を行う
	年度末報告	<p>執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 S</p> <p>理由 従来型の研究会をとシンポジウムを合計21回以上行い、その成果を都度web上で公開した。学会発表、書籍発行などを行った。さらに、イタリアでの国際シンポジウムも開催し、国際的な研究の成果を得た。その他、神田明神江戸東京文化講座を8回行い、社会人教育としての履修証明プログラムという新規事業を行った。</p> <p>改善策 2017年度から継続中の事業成果の多くは形にすることができたが、2019年度末以降に予定されていた研究事業が感染症対策のために停止した状態となっている。その分の遅れを取り戻す必要がある。</p>
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	東京の貴重な水辺である外濠・玉川上水をはじめ、東京の地域に対する関心を高め、具体的な環境改善につなげる
	年度目標	外濠に関する研究の蓄積を生かした市民活動を継続
	達成指標	外濠に関する研究の蓄積を生かした市民活動を継続
	年度末報告	<p>教授会執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 S</p> <p>理由 外濠に関する研究の蓄積を生かした市民活動を継続した。その一環として、2019年9月には田中優子総長が、東京理科大学学長・中央大学学長との連名で東京都知事に対し、政策提言を提出した。</p> <p>改善策 予定していた社会貢献・社会連携事業のうち、2019年度末以降の予定が感染症対策のために</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		停止した状態となっている。その分の遅れを取り戻し、計画を再考する必要がある。
【重点目標】		
今年度末には、2017年度から継続中の事業成果を総括し、公にする必要がある。既に研究成果は積み上げられているが、現在進行中の研究活動については可能な限り今年度中にまとめ、形にすることを重点目標とする。そのため、まずは研究プロジェクトの活動内容の再検討を行い、研究成果の書籍化やweb上での成果公開などを旨とする。		
【年度目標達成状況総括】		
2019年度の目的はブランディング事業の根幹である「市民・一般参加の拡大」にかかっていたが、新たな市民向け連続講座や履修証明プログラムなどを行い、一般参加者の拡大につとめることができた。また、建築家磯崎新氏を招聘したシンポジウム「東京は首都足りうるか」で700名を超える参加者を得るなど、大々的な研究企画を成功させた。センターの出版物（7冊）、さらに映像資料も作成するなど、大学のブランディング事業として多方面にアピールすることができた。		

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

「江戸東京の社会的・文化的特徴に関する研究と〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」という年度目標のもとに実施した事業は、研究会やシンポジウムを継続的に実施しつつ、イタリアでの国際シンポジウムの開催、さらに「神田明神江戸東京文化講座」のように新規普及事業に取り組むなど、積極的な活動は評価される。さらに、複数の大学学長と連名で都知事に政策提言をした点は、今後の行政と大学との政策連携の道を拓くものとして大いに注目される。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的研究教育拠点の形成。 エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所が共同し、国際化の時代に対応した先端的な江戸東京研究を行い、研究成果を社会に広く還元するとともに、持続可能な地域社会の構築を目指す教育拠点となる。
	年度目標	当センターのブランド化を推進するための一つの戦略として、そのターゲットを国内から国外へと広げるための「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」を年度目標とする。本年をさらなる飛躍の年として、2021年度に大きなまとめを実施し、2022年度以降も学内外でセンターの存続と研究の継続が認められる組織体につなげていきたい。
	達成指標	年度目標の達成のために、すでに実施した2020年1月のヴェネチアでの国際シンポジウムに続き、11月に日中韓を主体とするアジア国際シンポジウム、また秋には日韓の文化交流イベントを本学で開催する。こうして、主な達成指標は年度内に2回の国際シンポジウムを開催することであり、国際的な学術交流をより深化させるとともに、研究成果を世界に向けて発信していく。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	東京の貴重な水辺である外濠・玉川上水をはじめ、東京の地域に対する関心を高め、具体的な環境改善につなげる
	年度目標	各シンポジウムでは広報を積極的に行って参加を募り、知的な機会を社会に提供することが具体的な貢献となる。また、そこで得られた研究者や市民との間に交流のためのネットワークを築き、社会との連携を強めていく。とくに、国際シンポジウムという性格上、海外の人々との連携につなげることが期待できる。また、それらのシンポジウムの内容を著書や報告書として刊行し、ひろく成果の公表に重きを置くことで社会に貢献し、ブランド化の認知をさらに推し進めようとするものである。
	達成指標	2020年の3回にわたるシンポジウムの内容を書籍あるいは報告書として刊行し、広く社会に研究成果を広めることが具体的な達成指標となる。
【重点目標】		
「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」のみに集中し、それを重視して2020年度の目標とする。		
【目標を達成するための施策等】		
2020年1月のヴェネツィアシンポジウムに続いて、2回の国際シンポジウムを本学で開催する。		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

年度目標とする「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」に則して、アジア国際シンポジウム、日韓の文化交流イベントを開催するなど、積極的な研究交流や普及の取り組みは高く評価される。一方、前年度評価で指摘されたように、研究活動に社会貢献・社会連携が含まれており、両者を仕分けすることが求められる。

また、年度目標とする「江戸東京研究センターの国際的な発信及び交流の促進」を研究活動の目標としているが、はたして研究活動として適切であるか疑問が残る。研究活動とは、やはり研究内容が問われるものではないだろうか。本研究センターはHPの事業目的に述べられているように、エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所という、理系と文系の相互に異なる性格の研究機関が共同してより学際性を高めることであるならば、今後はミッションや施策に則した学際的な研究テーマを具体的に取り上げることがもとめられる。

社会貢献・社会連携については、コロナの影響により不透明な状況が続いているためにやむを得ないと思われるが、年度目標はやや具体性に欠けていると思われる。次年度以降の計画に期待するとともに、「達成指標」は質的・量的に具体的な内容を示すことが望ましい。

【大学評価総評】

江戸東京研究センターの研究活動は、シンポジウムやセミナーなどの交流・公開の機会を通じて活発に行われている。多彩な内容の著書、報告書、論文、学会発表、科研費の採択状況など、旺盛な研究活動には目を見張るものがある。教育活動についても、新たに「神田明神江戸東京文化講座」を開講するなど、社会教育活動に努めていることは高く評価できる。複数の大学学長と連名で都知事に政策提言をした点は、今後の行政と大学との政策連携の道を拓くものとして大いに注目される。

江戸東京研究センターの研究姿勢は、「異分野の融合」を目指したものとはいえ、自己点検・評価シートの記載内容を見る限りでは、諸研究を縦割的（個別、領域内の共同研究）に集合化させる様子が見られる。統一テーマのもとに異なる領域や専門分野を横串に通すスタイルの学際的な共同研究がほとんど見られないことは惜しまれる。実際には様々な検討や試みが行われていると思われるが、国のブランディング事業の中止と大幅な予算削減に伴う複数のプロジェクトの見直しとあわせて、江戸東京研究センターの設置理念に則して、学術論文や科研費の研究プロジェクトなどにより、学際的な共同研究の視覚化をはかることに期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。